

古代文字資料館蔵『寶訓百人一首』解題

中村雅之

1. はじめに

古代文字資料館に『寶訓百人一首』という版本(全1冊)がある。小倉百人一首の歌仙絵で、京都津逮堂の吉野屋仁兵衛が嘉永元年(1848)に刊行したものである。百人一首の写本・版本は無数に作られており、跡見学園女子大学では3000点を超えるコレクションを蔵している。ここで取り上げる『寶訓百人一首』も跡見学園女子大学に一本あり、画像も公開されているので、比較しながら概要を述べる。以下、古代文字資料館蔵本を「当館本」、跡見学園女子大学蔵本を「跡見本」と称することにする。

当館本表紙



跡見本表紙



2. 概要

当館本の奥付によれば発行は嘉永元年(1848)であるが、跡見本の奥付に年記はない。大きさは当館本が縦25cm×横17.5cm、跡見本は目録によれば縦25.2cm×横17.8cmである。本文は全50丁で、それぞれの丁のオモテとウラに一首ずつ全百首が歌の作者の絵とともに収められている。中身は全く同じであり、両本は同版と認めてよい。以下に両本の異なる点について述べる。

3. 表紙

上の画像で明らかなように、跡見本では題箋の書名の上に少し破れがある。そのため、インターネットに公開されている目録では、書名を「□寶訓百人一首」として欠落のあることを示している。当館本ではその部分に「躰」の字がある。書名というより、女性教育のための書であることを示す一種の標識のようなものであろう。百人一首は江戸時代には『女今川』や『女大学』などと同様に、女性教育用の教材として利用されることが多かった。そのため、書名の一部や副題にそのことを示す語が付されることが多い。本書『寶訓百人一首』の「寶訓」も「貴重な教訓」というほどの意味で、教育的効果を示唆したものであろう。

4. 見返し (=表紙の裏)

当館本の見返しには何もないが、跡見本では紫式部の歌を記した絵が貼られている。(ちなみに、当館本は保存状態が万全ではなく、所々にヨレやホツレがあるため、綴じ糸を外して撮影している。) 紫式部の歌は「水鳥を 水の上とや よそに見む われもうきたる 世を過ぎしつゝ」¹とある。『紫式部日記』寛弘五年の「行幸近くなりぬとて」の条に見えるもので、高校用教材などでは「うきたる世」という仮題でしばしば取り上げられる。百人一首の巻頭を飾るのに相応しいかどうかは判断しかねるが、実はこの絵は先行出版物からの使いまわしである。

当館本見返し

跡見本見返し



¹ 一般には「世を過ぎしつゝ」として知られるが、ここでは「過ぎしつゝ」になっている。

跡見コレクションを眺めると、津逮堂の吉野屋仁兵衛は本書以外にも各種の百人一首を出版しているが、それらの中に、すでにこの紫式部を描いた絵が何度も使われている。ざっと見ただけでも『女用世寶 操百人一首倭鑑』天保 5 年（1834）、『女用世寶 錦百人一首都織』天保 15 年（1844）、『増補躰方 女訓百人一首錦鑑：女文章 女今川 女大学 三の道』天保 15 年（1844）に全く同じ絵が見える²。これらでは見返しではなく、本文の中に挿入されている。その中でも最も印刷状態の良い『女用世寶 錦百人一首都織』のものを挙げておく。（インターネット上に公開されている跡見学園女子大学蔵本による）



左下隅には「大和繪師菱川清春画」と署名がある（拡大部分）。この署名は跡見本『寶訓百人一首』の見返しにも当然あり、そのため跡見学園女子大学の目録には『寶訓百人一首』の編著者の欄に「菱川清春画」とある。あたかも本文の歌仙絵が菱川清春によるものと誤解しそうだが、菱川清春が描いたのは紫式部の絵だけで、本文の歌仙絵は菱川清春とは関係ない。当館本のように見返しに何も無いのが当初の形であろうと推測される。

5. 修正書き込み

本文の1丁オモテにおいて、版木の摩滅からか墨のノリが良くない箇所があり、後から筆で補写している。まず、当館本と跡見本の両本とも「天智天皇」最初の「天」に筆を入れた箇所がある。さらに跡見本のみ、第一句「秋の田の」の最後の「の」と、それに続く「かりほの」の「ほの」に筆を入れた跡がある。なお、当館本では「天智天皇」の「智」の左上部分にも少し墨が入っているが、これは補写したというよりも、むしろ誤って筆が触れたものではなかろうか。跡見本と比べても、印刷された線にカスレがあったようには見えない。

² 書名はいずれも跡見学園女子大学のインターネット上の目録による。

当館本1丁オモテ



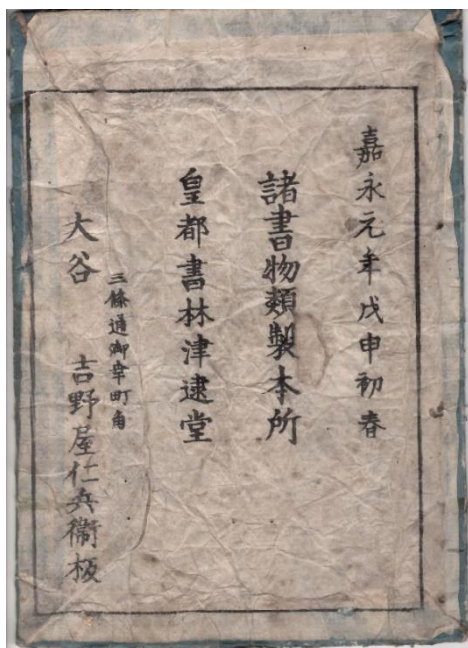
跡見本1丁オモテ



筆を入れた部分を両本で比べると、明らかに跡見本の方が多。つまり、跡見本の方が印刷した段階での版木の状態がよくなかったということである。見返しに使いまわしの絵が貼られたこと、および奥付に年記のないこと（後述）と併せて、跡見本の方が後の増刷本であることはほぼ疑いがない。

6. 奥付

当館本奥付



跡見本奥付

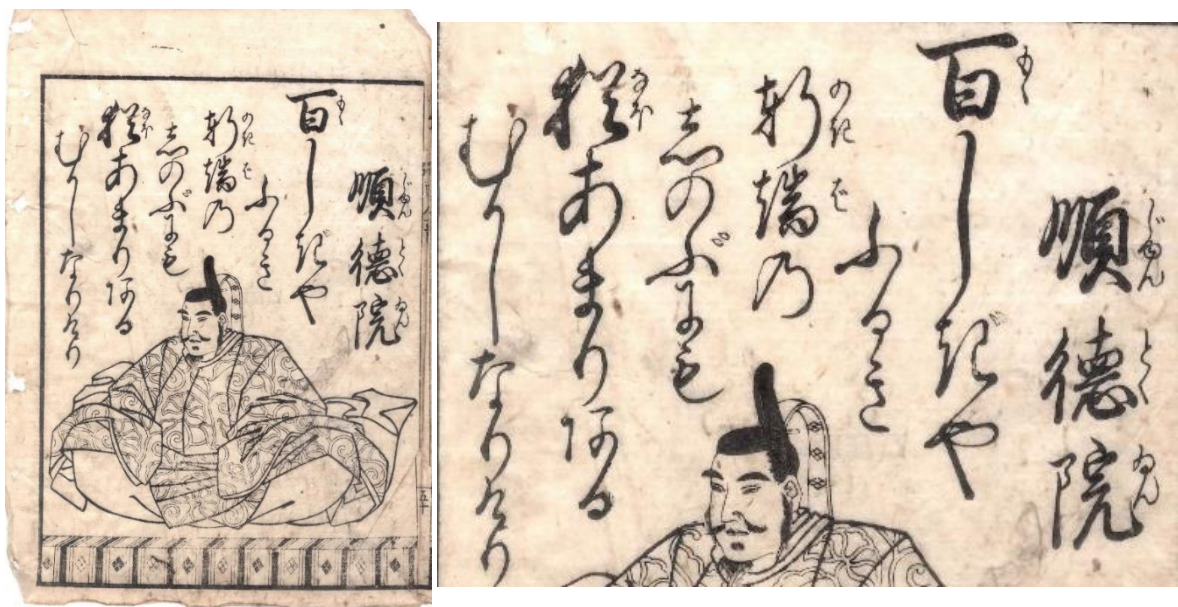


当館本と跡見本の奥付は一見して全く異なる。跡見本には「三体以呂波」と題されたいろは歌があり、背景に模様が添えられている。奥付部分の情報を見ると、年記の有無に違いがある。跡見本に年記はないが、当館本には「嘉永元年戊申初春」とある。嘉永元年は 1844 年にあたる。すでに述べたように、この年記のあるのが当初の形式であり、年記を省いて、見返りに菱川清春の絵を貼った跡見本が後の増刷本と見なし得る。

「皇都書林津逮堂」とあるのは、文字通りには京都の書肆である津逮堂ということである。当時京都には「京都書林仲間」と呼ばれる書物問屋の組合があった。ここでわざわざ「皇都書林」を付しているのは、津逮堂がこの組合のメンバーであることを明示したものと考えてよいのであろう。吉野屋仁兵衛には名古屋や江戸の書肆と共同で出版した本などもあり、かなり手広く出版事業を展開していたようである。

7. 濁点の表記

江戸後期の百人一首としてはごく普通のことながら、歌の本文に濁点が付されている。ごく大雑把に言えば、写本では濁点はなく、江戸初期の刊本では所々にあり、江戸後期の刊本では期待されるほぼ全ての位置に附される。『寶訓百人一首』でも通例に違わず、多くの濁点が見られるが、本文に附された濁点が全て白抜きになっている点が他書と異なる。振り仮名の濁点は普通の濁点である。以下は当館本 50 丁ウラの最終歌である。



第一句「ももしきや (百し記や)」の「記」と第三句「しのぶにも (志のぶるも)」の「ふ」に白抜きの濁点を確認できる。「順徳院」の振り仮名の「じゆん」では通常の濁音である。このやり方は徹底されている。上に見た天智天皇の第一首も再度拡大して確認しておこう。



第四句「わがころもでは（わ可衣手盤）」の「か（可）」に白抜きの濁点が見える一方、振り仮名の「ころもで」の「で」は普通の濁点である。

他の書に白抜きの濁点が出てくる例を寡聞にして知らない。習字の手本とする際に濁点を写さないように、書きにくい形にしたものか、あるいは単なる遊びなのか、不明である。

8. おわりに

以上、『寶訓百人一首』について、跡見本との比較を中心に概要を述べた。江戸時代を通じて百人一首は繰り返し出版されたが、江戸後期になると歌仙絵単体で出るよりも、女大学など女性教育用の文章とともに出版されることが多かった。『寶訓百人一首』のように単体で出版されて、文字も絵も美しいものはあまり残っていない。跡見本は保存状態もよく、全頁の画像がインターネットで確認できるので、一度ご覧いただきたい。当館本も全ての画像を公開できれば思っているが、しばらく時間がかかりそうである。